

3. 提案手法：構造保持型グリップ

Fig.3 従来グリップ vs IKS構造保持

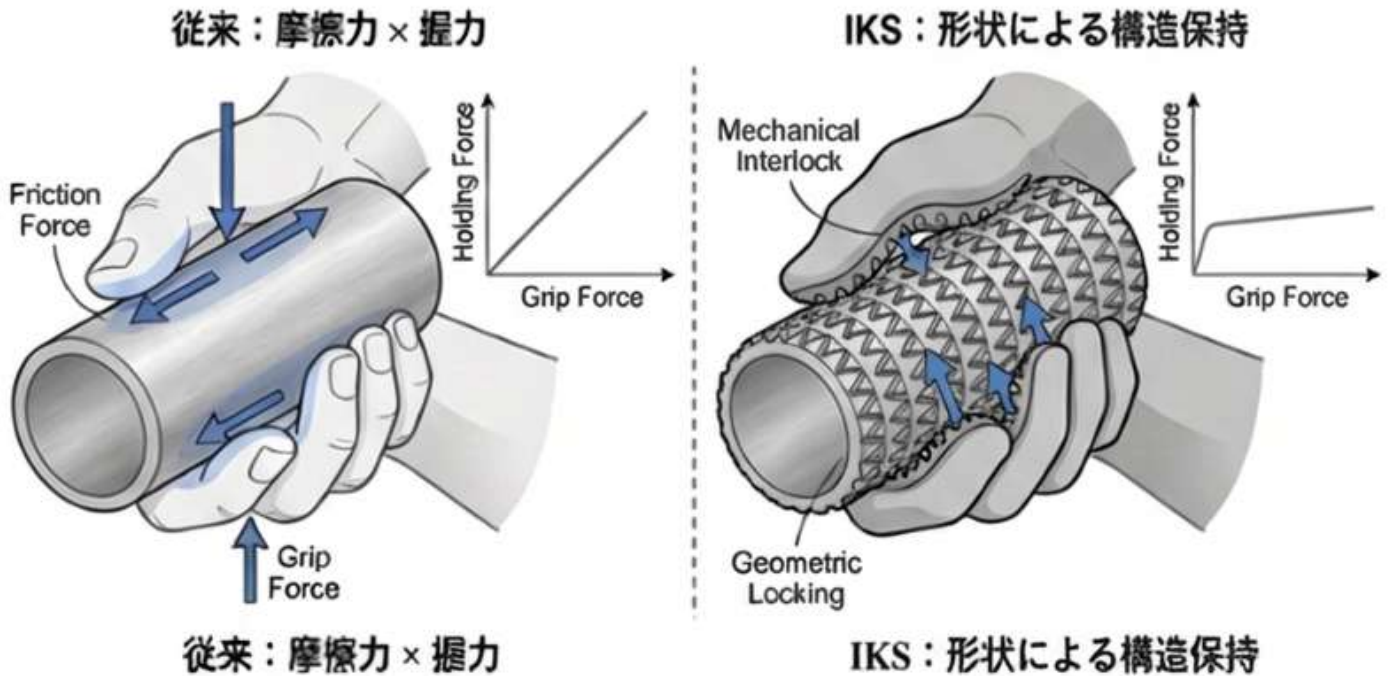


Table 2. 保持メカニズム比較

パラメータ	従来グリップ	IKS構造保持	備考
保持メカニズム	摩擦力依存	形状による構造保持	IKSは物理的ロックを利用
握力依存度	高い	低い	IKSは初期係合後、低握力で維持可能
表面接触	平滑面接触	三次元パターンによる係合	IKSは接触面積と摩擦依存が少ない
疲労要因	高い (持続的握力が必要)	疲労負担軽減の可能性	瞬間保持と可動性の両立
適用環境	乾燥環境が望ましい	湿潤・油環境でも有効	IKSは摩擦低下の影響を受けにくい

IKS構造保持は、摩擦力と握力への依存を低減し、三次元形状による保持を可能にする新しい概念である。これにより、必要以上に握力を高めることなく安定した保持が期待できる。特にスナップ動作を伴う競技において、可動性を維持しながら保持力を確保することが、面角度の再現性向上に寄与する可能性がある。